

## 山古志の角突き闘牛大会

山古志は、伝統的な闘牛大会が今も行われている日本に現存する9カ所のうちの1カ所です。この慣習は1000年前に始まったと考えられており、当時、山古志の農民は農作業を牛に依存しており、牛同士の試合が時折娯楽として行われていました。娯楽は江戸時代（1603年～1867年）に、より組織化され、19世紀後半から20世紀初期には特に人気がありました。山古志の闘牛は、他の地域で「闘牛」や「牛相撲」という呼び名が使われるのとは異なり、「角突き」と呼ばれます。国の重要無形民俗文化財に指定されています。

### 勝者も敗者もない

山古志の角突きが他の闘牛と大きく違うのは、牛の怪我を防ぐ努力が払われていることです。歴史的に、山古志の牛は主に農耕や荷物の運搬のための動物でした。牛が大怪我をすれば、飼い主の生活に大きな影響を与えることになります。さらに、戦いで勝者と敗者が明確になると、小さなコミュニティ内の村人の間に負の感情を生じさせる可能性があります。こうした理由から、山古志ではどちらかの牛が怪我をする前に引き分けを宣言するのが風習となりました。闘牛場の「勢子」と呼ばれる試合の担い手は、それぞれの闘いを注意深く観察し、双方の牛が個々の強さを誇示して観客を楽しませた時、または一方の牛が相手を圧倒するか傷つける可能性があると思われるときは引き分けを宣言します。

### 牛の角突き大会

山古志の闘牛は、いくつかの点が相撲に類似しています。大会は5月から11月まで、各大会は10～13試合で構成されています。若い牛同士の試合から始まり、その後より強力で経験豊富な牛同士の試合へと続きます。

はじめに闘牛場が塩と酒で清められ、勢子は主催者とともに輪になり、手打ちをしたり手を上げたりして大会の安全を祈願します。試合中、闘牛場では日本語で試合内容が発表され、教育的要素のある情報や情熱的な解説の場内アナウンスがあります。最初の数試合は、すぐに誘導したり引き離したりする必要がある場合に備えて、鼻輪をロープで繋がれた牛の間で行われ、後の試合では、より自由に闘うために牛が解放されることもあります。引き分けが決まると、素早く牛の後ろ足にロープを掛けて離し、勢子は必要に応じて牛の間に分け入り角を引き離します。

### 試合する雄牛

山古志闘牛大会に出場する牛は3歳の春にデビューします。昔は、伝統的には角突きに参加する牛は主に家畜でしたが、現在では角突き専用として飼育されています。それぞれの牛には、男らしく、ドラマチックな名前が付けられています。飼い主の商売にちなんだ名前の場合もあります。現在、山古志と闘牛の伝統がある別の地域から約50頭の牛が大会に参加しています。